

那覇方言の指小辞「グワー」の意味・用法

齋藤 泉実

1. はじめに

指小辞とは、次のように規定される文法形式である。

名詞・形容詞・副詞などにつけて、「小さい」という概念を表す接辞。指小辞の表わす「小さい」という概念は、広く愛称・軽蔑語・強意語などとして用いられる場合もある。日本語では、「小川」「ちびっ子」などや、接尾辞的な「武ちゃん」などがある。
(『現代言語学辞典』より抜粋)

日本語の方言の中に存在する指小辞として、東北方言の「コ」、那覇方言の「グワー」というものがある。それぞれの指小辞を使用している地域を、図1「子牛」の方言分布により確認すると、「コ」は「ベコッコ」「コッコベコ、コベコ」「マレベコ(コ)」を使用する青森県・岩手県・秋田県・宮城県・山形県・福島県のおよそ東北地方全域であり、「グワー」は「ウシグワー」を使用する沖縄本島南部(那覇市を含む)である。

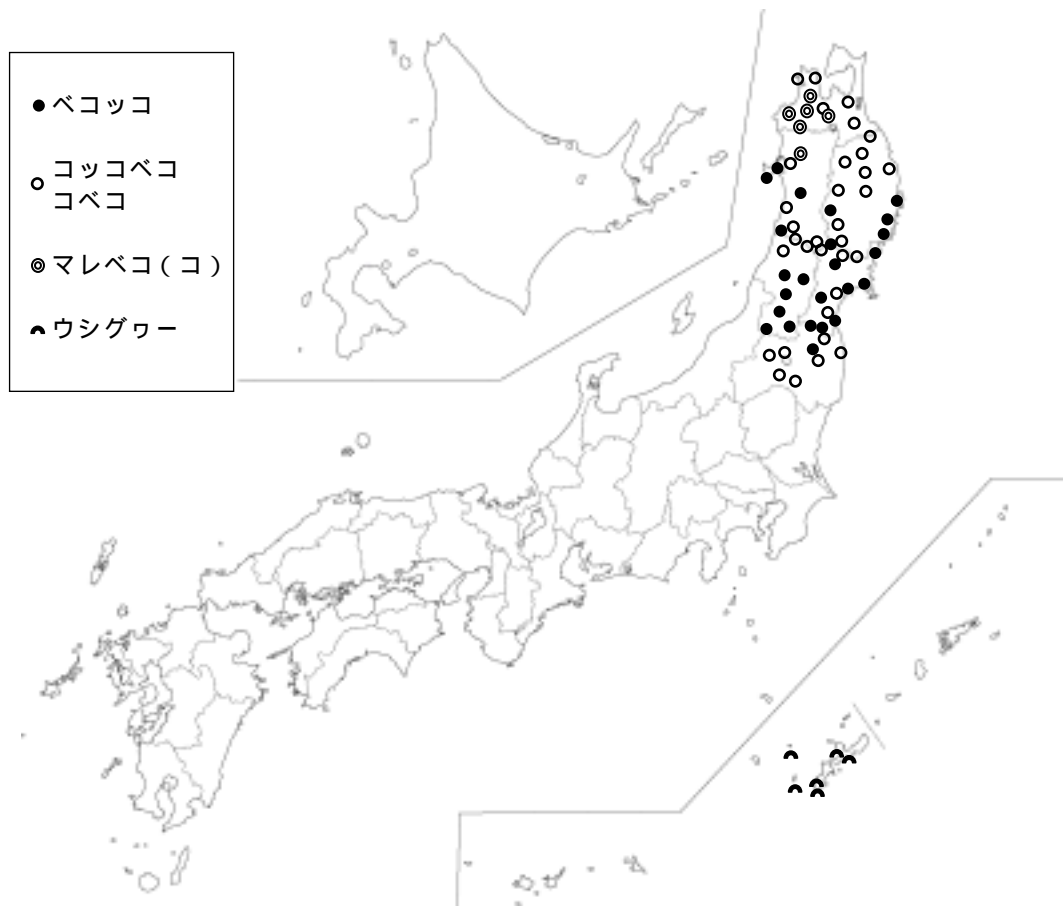


図1 子牛 (佐藤亮一監修・小学館辞典編集部編(2002)を元に作図)

「コ」と「グワー」は同じ指小辞であるが、その用法は完全に一致しているわけではない。そこで、以下では、まずこれら二つの指小辞「コ」と「グワー」の用法・意味を比較し、その類似点及び相違点を検討する。そして、現地での聞き取り調査と昔話の分析により、「グワー」の意味・用法をより詳細にしていきたい。

2. 「コ」と「グワー」の類似点と相違点

2.1 「コ」の意味・用法

ここでは、まず、比較的良好に知られている東北方言の指小辞「コ」の意味・用法についての先行研究を見ていく。

まず、日野(1958)は、「コ」の性格について、従来言われてきたこととして「特に小さくてかわいらしい生物の名称を表す単語のあとにつけて、話手の、その対象に対する親しさ、愛情などを示す」と述べ、またその機能として、「その場にいる聞き手(主として子供)に対して、言葉遣いをやさしくするためのもの」としている。さらに、これらを捉えなおした結果、「生物・事物、事柄等を表す名詞のあとにつき、その語で表される対象が、その話し手によって具体的に把握されていることを表す」という見解を示している。

一方、阿部(1999)は、青森県弘前方言における指小辞「コ」の下接に関する制約を次のように述べている。

上接する語の品詞は名詞に限られる(「動くコ」「早いコ」「早くコ」とはならない)。語種は、名詞であれば漢語や外来語にも接続する。ただし名詞に接続する場合でも、以下のような制約がある。

- (1) 固有名詞、形容名詞(太郎、富士山、愉快、明瞭など)には下接しない。
- (2) 意味素性が[+人](料理人、先生、市民、バッターなど)には下接しない。
- (3) 「こ」連続の禁止(判子、冷蔵庫、パチンコ、稽古など)には下接しない。

さらに阿部は、プロトタイプ理論を援用し、概念カテゴリーの内部構造のうち上下の構造に注目し、以下のようにまとめている。

- (1) より下位のカテゴリーに「コ」が下接し得る場合、それよりも上位にあたる語には「コ」が下接し得る。(下位カテゴリーであるビールが「ビールッコ」となるならば、その上位カテゴリーである酒も「酒ッコ」となり得る。)
- (2) 基本レベルカテゴリーの語(花、酒など)には必ず「コ」が下接する。
- (3) ある語が、上位のカテゴリーに位置する語のプロトタイプ的な語であるほど、「コ」が下接し、周辺的であるほど下接しにくくなる。

つまり、話し手が名詞にどれだけ馴染があるか、そのものをどれだけ身近に感じるかということには個人差が生じるという、認知意味論的な現象があるとしている。これは日野の述べる「生物・事物、事柄等を表す名詞のあとにつき、その語で表される対象が、その話し手によって具体的に把握されていることを表す」という見解と同様の指摘であると言える。

2.2 「グワー」の意味・用法

では、日野（1958）と阿部（1999）の東北方言の「コ」に関する先行研究を踏まえて、「グワー」の先行研究を見ていく。

野原（1992）は、「那覇方言の、いわゆる指小辞グワーは、イシグワー（石グワー）、キーグワー（木グワー）、イングワー（犬グワー）と何にでも付きそうであり、那覇方言の極めて特徴的な形式といってよいだろう」と述べ、その意味を以下のように説明している。

まず、他の意味との関連を考え、「ただ小さいもの」を「グワー」の意味の中心にすえ、形状的に小さいものに付ける事ができるとしている。「必ずしも小さいと明確に判断している訳ではない」物にも付けることができるが、やはり「小さいことの反対の、大きいという概念は全くないといえる」と述べている。また、心情的に小さいことをさし、それは可愛い、親しみの気持ちを表したり、容易に卑屈にも通じることから、さげすみの意味に関連していく。さらに、手塩にかけて育てて花には「花グワー」とは言い難く、「グワーは、美しい、立派なという心意とは、少しく隔たった位置にあるようである」とも述べている。

次に、さげすみの言葉（フラ（馬鹿）など）、親族呼称（タンメ（おじいさん）など）、職業（シンシー（先生）など）に接続すると「小さい」という概念から派生した意味として、さげすみの意を表す。ただし、さげすみの言葉に「グワー」を接続した場合、親密な相手に対しては、親愛の意味で使用されることもある。また親族呼称も、自分に近い位置の人に接続する場合は親しみの意味の場合が多い。

東北方言の「コ」は人名詞には付かないが、「グワー」は上記の親族呼称や職業などの人名詞にも付く。さらに、以下のように人名に接続することもできる。

- ・チルー（鶴） チルーグワー
- ・タルー（太郎） タルーグワー

人名に接続する「グワー」は、その人物に対する親愛の意を表すことが多い。これもまた「小さい」という意味から派生したものである。しかし、その人物に対して好意を抱いていない場合は漸次さげすみの意味が強くなる。また、目上の人物に対しては使用しにくい。よって「グワー」の意味は絶対的なものではなく、相手との関係や文脈に応じて相対的に決まってくるものと言える。

さらに「コ」と「グワー」の大きな違いは、「グワー」が以下のような形容語（性質や状態を表す語、副詞・形容詞・形容名詞など）にも接続する点である。

- ・ウフウフトゥ（多と）→ウフウフトゥグワー
- ・マギマギートゥ（大と）→マギマギートゥグワー
- ・チュラーク（美しく）→チュラークグワー
- ・リッパ（立派）→リッパグワー

一方、「グワー」は、人代名詞、時間を表す語、疑問語、もともと大きいもの、地名、には付かない。また、副詞、連体詞、感動詞、活用語、助詞、助動詞、文章にも付か

ない。しかし例外として、時間を表す語でも、「ナマ(今)」「ヒッチー(一日)」「チュチチ(ひと月)」などには付く。また、地名でも小さな字には付く場合もあり、親愛の意を表しているようである。副詞については、上記の「ウフウフトゥ(多多と)」「マギマギートゥ(大大と)」のように「グワー」が接続するものもある。この他に例外として「ヨンナー(ゆっくり)」にも「グワー」が接続する。

以上で見てきたことから、東北方言の「コ」と那覇方言の「グワー」の共通点と相違点は、以下のようにまとめられる。

- ・ 共通点：形状的に小さいものを表す語に接続し、その対象への親しみを表す。
- ・ 相違点：「グワー」は固有名詞、形容名詞、人の意味を含む名詞及び形容語に接続することができるが、「コ」はこれらには接続しない。

ただし、「グワー」については、先行研究の記述の範囲では不明な点もある。まず、野原は「グワー」が接続する語種については例を挙げているが、その根拠については特に述べていない。また、「グワー」が接続した際のニュアンスについても、説明していないものも多い。よって、「グワー」の意味・用法をより詳細に記述し、「コ」との異同を明確にするため、野原(1992)に挙げられている単語を参考にして調査票を作成し、調査を行った。

3. 那覇方言「グワー」の意味・用法と使用意識

3.1 調査の概要

現地調査では、以下にあげる話者9名に対し、聞き取り調査を行った。

- | | | |
|-----|---|----------------------|
| 老年層 | A | 男性・1943年生まれ・那覇市首里出身 |
| | B | 女性・1935年生まれ・那覇市首里出身 |
| | C | 女性・1943年生まれ・那覇市首里出身 |
| | D | 男性・1940年生まれ・那覇市首里出身 |
| | E | 男性・1934年生まれ・那覇市泊出身 |
| | F | 男性・1929年生まれ・那覇市泊出身 |
| | G | 男性・1950年生まれ・那覇市首里出身 |
| 若年層 | H | 男性・1985年生まれ・宜野湾市嘉数出身 |
| | I | 女性・1984年生まれ・那覇市首里出身 |

調査項目は、以下のものである。

1. 「グワー」が接続する語の語種
 - 1-1 漢語：試験、問題、仕事、学校
 - 1-2 外来語：テレビ、ガラス、ネクタイ、コンビニ
 - 1-3 方言/標準語：ミー/目、キー/木、カティムン/おかず、ホーチャー/包丁、ティンジョー/天井
2. 「グワー」が接続した語のニュアンス
 - 2-1 動物：牛、馬、イン(犬)、マヤー(猫)、イユ(魚)、トゥイ(鳥)、クラー(雀)、鳥、鷹

2-2 人名詞

- ・人名：チルー（鶴） カマルー（釜） タルー（太郎） ナビー（鍋）
- ・親族語：タンメー（おじいさん） ターリー（お父さん） ウウトゥ（夫） トウジ（妻） ウットゥ（弟・妹）
- ・性質：フラー（馬鹿） リキヤー（秀才） ガッパヤー（おでこ） ナチブサー（泣き虫）
- ・職業：シンシー（先生） ヌスル（盗人） ジュンサ（巡査）

2-3 形容語：ウフウフトゥ（多多と） マギマギートゥ（大大と） チュラーク（美しく） リッパ（立派）

この項目の全てを調査したのは話者A～Fであり、話者G～Iは確認のための調査をしたため調査票の全項目を質問していない。したがって、全項目の回答を得た話者A～Fの回答のみを表1に示し、それに沿って分析をしていく。

表1 「グラー」の意味・用法の回答一覧

調査項目		A	B	C	D	E	F		
1 グラーは どのよう な語に 接続す るのか	1-1漢語	試験	x	x	x	x	x	x	
		問題	x	x	x	x	x	x	
		仕事	x				x	x	
		学校	x	x	x	x	x	x	
	1-2外来語	テレビ	x		x		x	x	
		ガラス	x	x	x	x	x	x	
		ネクタイ					x	x	
		コンビニ	x	x	x	x	x	x	
	1-3標準語 と方言	[方言] ミー					x		
		[標準語] 目	x	x	x	x	x	x	
		[方言] キー							
		[標準語] 木	x	x	x	x	x	x	
		[方言] カティムン							
		[標準語] おかず	x	x	x	x	x	x	
[方言] ホーチャー				x					
[標準語] 包丁		x	x	x	x	x	x		
[方言] テインジョー	x	x	x	x		x			
[標準語] 天井	x	x	x	x	x	x			
2 グラーが 接続し た語は どのよう なニュア ンスを持 つのか	2-1動物	牛	子どものみ	x	x	x	子どものみ	x	
		馬	子どものみ	大人も含む	大人も含む	大人も含む	x	x	
		イン(犬)	大人も含む	大人も含む	大人も含む	大人も含む	大人も含む	大人も含む	
		マヤー(猫)	大人も含む	大人も含む	大人も含む	大人も含む	大人も含む	大人も含む	
		イユ(魚)	物理的な大きさによる	物理的な大きさによる	物理的な大きさによる	物理的な大きさによる	物理的な大きさによる	物理的な大きさによる	
		トゥイ(鳥)	大人も含む	大人も含む	大人も含む	大人も含む	大人も含む	大人も含む	
		クラー(雀)							
		鳥	x	x	x	x	x	x	
	鷹	x	x	x	x	x	x		
	2-2人名詞	2-2-1 人名	チルー(鶴)	文脈による	親しみ	親しみ	親しみ	文脈による	文脈による
			カマルー(釜)	文脈による	親しみ	親しみ	親しみ	文脈による	文脈による
			タルー(太郎)	文脈による	親しみ	親しみ	親しみ	文脈による	文脈による
			ナビー(鍋)	文脈による	親しみ	親しみ	親しみ	文脈による	文脈による
		2-2-2 親族語	タンメー(おじいさん)	蔑み	蔑み	蔑み	蔑み	蔑み(卑下)	蔑み(卑下)
ターリー(お父さん)			蔑み	蔑み	蔑み	蔑み	蔑み	x	
ウウトゥ(夫)			蔑み	x	x	x	x	x	
トウジ(妻)			親しみ	親しみ	親しみ	親しみ	親しみ	親しみ	
2-2-3 性質		ウットゥ(弟・妹)	親しみ	親しみ	親しみ	親しみ	親しみ	親しみ	
		フラー(馬鹿)	文脈による	親しみ	文脈による	文脈による	蔑み	蔑み	
		リキヤー(秀才)	x	親しみ(尊敬)	親しみ(尊敬)	親しみ(尊敬)	親しみ	親しみ	
		ガッパヤー(おでこ)	x	親しみ	文脈による	文脈による	文脈による	文脈による	
2-2-4 職業		ナチブサー(泣き虫)	親しみ	親しみ	親しみ	親しみ	親しみ	親しみ	
		シンシー(先生)	蔑み	蔑み	蔑み	蔑み	蔑み	蔑み	
		ヌスル(盗人)	親しみ	許せる範囲の泥棒	許せる範囲の泥棒	許せる範囲の泥棒	蔑み	蔑み	
		ジュンサ(巡査)	蔑み	蔑み	蔑み	蔑み	蔑み	蔑み	
2-3形容語	ウフウフトゥ(多多と)	x	x	x	x	x	x		
	マギマギートゥ(大大と)	x	x	x	x	x	x		
	チュラーク(美しく)	親しみ	親しみ	親しみ	親しみ	親しみ	親しみ		
	リッパ(立派)	親しみ	x	x	x	x	x		

3.2 「グワー」が接続する語の語種

「グワー」接続する語を語種の違いから考察するため、漢語、外来語、標準語と方言という項目を設けた。

漢語については、四つの項目において、ほぼ全ての話者が「グワー」は接続しないと回答した。これは、漢語であるからというより、標準語の語彙であり、調査項目として挙げた語が日常会話であまり使用する単語ではないため、身近に感じる事がなく接続しないのであろう。「仕事」には「グワー」が接続するという回答が3名の話者から得られたが、これは「ちょっとした仕事」という意味になるということであり、やはり「グワー」は小さく身近な物でなければ接続しないと言える。

外来語もまた、「グワー」が接続するかどうかは外来語であるためというよりは、そのものが自分にとって身近な物であるかどうかに寄るようだ。例えば「コンビニ」について言えば、表に挙げた6名の話者は全員が「グワー」は接続しないという回答だったが、20代の話者Hは、「コンビニ」には「グワー」は付くかもしれないと話していた。これは、若い世代にとっては「コンビニ」は身近なものであるが、老年層にとっては「コンビニ」はあまり身近な存在とは言えないためではないだろうか。また、「ネクタイ」は「グワー」を接続すると回答したのは、6名中4名と外来語の他の項目よりも多いが、「ネクタイ」は大きいものではないし、身に付けるのもであるため、他の項目のものより比較的身近に感じやすいのだろう。この様に、そのものを身近に感じるかどうかは個人差や世代差があるため、「グワー」を接続するか否かに差が生じたのであろう。

標準語と方言に「グワー」の接続のしやすさに差があるかという項目では、調査項目として挙げた語では、標準語形には全て「グワー」は接続しないという回答であった。一方、方言形はほぼ全ての話者が「ティンジョー」を除いた全ての語に「グワー」は接続すると回答している。これは、方言の方が標準語よりも言葉としてより身近な存在であるためと考えられる。「ティンジョー」に「グワー」が接続しない理由としては、天井は頭上にありあまり視線に入るものでもないため、その存在を意識することも少なく身近に感じられないためであろう。また、大きいものだからだということも理由のひとつである。ここに指小辞の表す「小さい」という概念を見て取ることができるだろう。「キー（木）グワー」は植木程度の小さい木であるし、「カティムン（糧物＝おかず）グワー」はつまみのようなちょっとしたおかずなのだと話者も話していた。方言だから全て「グワー」接続するというのではなく、「小さい」という概念が重要なのだ。

3.3 「グワー」が接続した語のニュアンス

「グワー」が接続した語はどのようなニュアンスを持つのかを調査するため、先行研究と指小辞の「小さい」という概念から考え、動物、人名詞、形容語の項目を挙げた。

(1) 動物

動物は種によって大きさが異なり、さらに同じ種であっても成長段階によって大きさが変化する。そのため「グワー」が「小さい」という概念を表すことからすると、成長して大きくなると「グワー」が接続しにくいのではないかと考えた。そこで、調査項目では、大型動物として「牛」と「馬」、小型動物として「犬」と「猫」を設定した。また、「鳥」と「魚」は種類によって大きさが異なる。「鳥」については総称としての「鳥」以外にも大きさの異なる「雀」「烏」「鷹」を挙げた。調査の際は、それぞれ幼少期(子ども)と成体(大人)に「グワー」の接続のしやすさに違いがあるかを確認した。

まず、「牛」は「グワー」が接続すると回答した話者は2名だけであり、またそれも幼少期(子ども)のみと言うことであった。図1「子牛」では「ウシグワー」とあるが、今回の話者は大きさを強く意識しているようで、「牛」は成体(大人)はもちろん幼少期(子ども)であってもある程度大きいものであるため、「グワー」が接続しにくいのではないのだろうか。「馬」もまた成長するとある程度大きいものだが、成体(大人)も含むという回答があった。これは、「馬」に「グワー」を接続すると成体(大人)も含むと回答した話者Cが、「馬は牛よりも身近な存在である」と話していたことを考えると、そのものがいかに自分にとって身近なものであるかが関係していると思われる。そのものを身近に感じるかどうかは個人差があるため、回答に差が生じたのだろう。

「イン(犬)」「マヤー(猫)」に関しては、全ての話者が「グワー」が接続可能で成体(大人)も含むという回答だった。これは、「イン(犬)」「マヤー(猫)」は、成体(大人)になっても極端に大きくなるというわけではなく、ある程度の小ささがあるためであろう。「イユ(魚)」は全ての話者が「物理的な大きさによる」という回答をしていた。「魚」は種類によって大きさにかなりの違いがあるため、幼少期(子ども)か成体(大人)かは関係なく、そのものの大きさ次第ということである。例えば鯛のような小さな魚は稚魚も成魚も「グワー」を接続できるが、鮪のような大きな魚の成魚には接続できないのである。

また、「鳥」の中にも大きさの違いがあるため、「クラー(雀)」「烏」「鷹」という項目を挙げた。このうち「グワー」を接続するのは、「クラー(雀)」だけであり、「クラーグワー」というのが当然だということだった。「雀」は小さく可愛らしいものであるし、おそらく日常的に目にする存在なのだろうから、身近に感じ「グワー」を接続できるというのは納得できる。では何故「烏」と「鷹」には「グワー」が接続しないかというと、それは、「鷹」は日常的に目にするものではないし、「烏」は「鷹」よりは目にしやすいかもしれないが、ゴミをあさったりしていて親愛の情を感じるような存在ではなく、身近な存在ではないからであろう。

(2) 人名詞

次に、人名詞として、人名、親族語、人の性質を表す語、職業を挙げた。

人名は、三名の話者が、「グワー」を接続した場合の意味は文脈により変わると回答した。普段は大体親しみの意味であるが、喧嘩をしていたり相手を馬鹿にしているとき等に人名に「グワー」を接続すると蔑みの意味になるのだという。単に親しみの意味になると回答した話者も三名いたが、これは喧嘩の場面というものはなかなか想定しにくいいためこう回答したが、実際は蔑みの意味になることもあり得るのかもしれない。この項目で挙げているのはいずれも幼少時に用いるワラビナー(童名)のみだが、実際にはワラビナーで呼ぶ子供だけに「グワー」を接続するのではなく、大人同士でも人名に「グワー」を接続し、その場合もまた文脈によって意味が変化するのだという。また、あまり親しくない間柄では「グワー」は接続しにくいようで、ここでも「グワー」を接続するには身近さが必要だということがわかる。

親族語では、先行研究で示されていた通り、「タンメー(おじいさん)」や「ターリー(お父さん)」は、「グワー」を接続した場合は蔑みの意味になり、「ウットゥ(弟・妹)」は、自分に近い立場のものであるから親愛の意になるという結果が得られた(「ウットゥ」は、調査では項目を「ウットゥヌチャー」としていたが、これは複数形であり、実際には「グワー」が接続するのは「ウットゥ」の形であると話者A・E・Fが述べていた)。これは、単に「グワー」を親族呼称に接続すれば蔑みの意味になるということではなく、目上の者に接続したら蔑み、目下のもの・自分に近いものに接続したら親しみの意味になるということであろう。

また、「グワー」が接続すると何らかの意味が加わると考えていた「ウットゥ(夫)」は、5人の話者が「グワー」は接続しないと回答している。この理由は次のように考えられる。那覇方言では、同じ「結婚する」ということを言うにしても、男性は「トゥジ トゥーメーユン」、女性は「ウットゥ ムチュン」と言う。「トゥーメーユン」は「捨う」という意味であり、「ムチュン」は「持つ」という意味であるので、「トゥジ トゥーメーユン」は「妻を捨う」、「ウットゥ ムチュン」は「夫を持つ」となる(『琉球語辞典』より)。ここに、夫の方が妻よりも立場が上であるという意識が見取れる。「ウットゥ(夫)」は妻から見た呼び方であるため、下の立場の妻からは自分の夫を「グワー」をつけて呼ぶことなどあまり考えられないのではないだろうか。もし「ウットゥグワー」と言えるとなると、それは夫婦関係が良好ではないのかもしれない。一方、「トゥジ(妻)」に関しては、6名の話者全員が「グワー」を接続した場合親しみの意味となると回答している。これは、妻が夫よりも下の立場にあるため、夫が「トゥジ(妻)」に「グワー」をつけて言うときには、親しみの意味になるということに納得できるだろう。

性質を表す語では、まず、「フラー(馬鹿)」という語は意見の違いが見られた。二名が「グワー」を接続すると蔑みの意味だと回答しているが、「フラー(馬鹿)」には元々の意味に蔑みを含まれているので、それを強調した形なのだろう。文脈によるという回答だが、本気で相手に対して怒りを持っているればやはり元々の意味の強調にな

るのだろうし、例えばちょっとしたどじをした相手にからかうような気持ちで使えば、親しみの意味になるのだろう。「リキヤー（秀才）」は五名が親しみという回答をしたが、そのうち三名は尊敬の念も含んでいると回答した。才能の優れた人に対する敬愛の意を、「グワー」を接続することによって強調していると思われる。「ガッパヤー（おでこ）」は、「グワー」を接続すると「おでこがとがっている」という意味になるのだという。文脈によるという回答が多かったのは、喧嘩の時などにとがっていることを馬鹿にしようと思って使えば蔑みであるし、特徴的でかわいいなどと考えて使用すれば親しみの意味になるのだろう。「ナチブサー（泣き虫）」は全員が親しみの意味だと回答しているが、これは、泣き虫というと子供のことが思い浮かぶからではないだろうか。いい大人は普通は泣き虫であるはずがない、だから「ナチブサーグワー」というと必然的に子供のことを指し、子供はかわいい存在であるから、親しみの意味になるのだろう。

職業の項目では、「シンシー（先生）」と「ジュンサ（巡査）」に「グワー」を接続すると、全員が蔑みの意味になると回答した。これは、本来尊敬すべき存在を小さく見ているためである。「ヌスル（盗人）」は、二名の話者は蔑みと回答した。泥棒は犯罪であるので、それを軽蔑するのは当然の気持ちであろう。しかし、親しみ、許せる範囲の泥棒という回答もある。「ヌスルグワー」というと、どの話者も空き巣のような程度の小さい泥棒だと話していた。つまり、強盗のような大きな犯罪に比べて空き巣はまだかわいいものだという意識から、親しみの意味になるのだろう。

（３）形容語

最後に形容語だが、先行研究によれば、「ウフウフトゥ（多多と）」「マギマギートゥ（大大と）」「チュラーク（美しく）」「リッパ（立派）」の語に「グワー」が接続するとされていたが、今回の調査では「グワー」が接続するのは、ほぼ「チュラーク（美しく）」のみに限られていた。これはおそらく、野原（1992）も述べているように、「チュラーク（美しく）グワー」が形容しているものに対しての親愛の情を表しているのだろう。一方、今回の調査で「ウフウフトゥ（多多と）」「マギマギートゥ（大大と）」「リッパ（立派）」に「グワー」が接続しないという回答が大半を占めたのは、これらの語は、そう形容される時点で「大きい」という概念を含むからではないだろうか。

形容語については、「グワー」が接続した場合のニュアンスは文脈によるようで、一律ではないようだ。そこで次に、昔話に用いられた「グワー」の用例を見ることで、「グワー」が接続した語の表現効果（文脈的意味）について考察する。

４．昔話に見られる「グワー」の分析

ここでは、現地調査では明確にならなかった、文脈による「グワー」の表現効果（文脈的意味）を昔話の「グワー」の使用例により分析していく。

以下には、『「うちなー口」で語り聞かせるふる里の民話』から採集した「グワー」

の使用例を挙げる（表記と読みは原文による）。

名詞：娘^{あば}ぐわー チル（鶴 = 女性の人名）ぐわー 生物^{いちむし}ぐわー 雀^{くら}ぐわー
猫^まぐわー 牛^{うし}ぐわー 負^なぐわー 目^めぐわー 赤舌^{あか-しほ}ぐわー 子^こぐわー
首^{くび}ぐわー 一人^{ひとり}ぐわー 小聲^{こまごい}ぐわー 石^{いし}ぐわー 家^{いえ}ぐわー 裏座敷^{うらざぶ}ぐわー
小島^{こしま}ぐわー 島^{しま}ぐわー 坂^{さか}ぐわー 酒^{さけ}ぐわー カラスグワー 話^わぐわー
あんべー（案配）ぐわー

形容語：少^{いふい}ぐわー 少^くてんぐわー 一時^{いっとうち}ぐわー 一瞬^{いっとうち}ぐわー 突然^{あつた}ぐわー
突然^{あつた}ぐわー 早々^{はや-はや}ぐわー 今さち^{いま}ぐわー 近^{くま}ぐわー
うとうとう（うとうと）ぐわー すっとう（こっそり）ぐわー
かなさ（かわいい）ぐわー 青^{あお}ってんぐわー 豊豊^{ゆうゆう}とう（豊かに）ぐわー
まっ赤^からーぐわー 不思議^{ふしぎ}ざさぐわー ぬびぬびーとう（のびのびと）ぐわー
ふんぬぐわー（あきれかえって）

動作語：手あんだぐわーかきていー（腕によりをかけて） 涙^{なだ}ぐるぐるーぐわー（涙
でうるませて）

4.1 名詞に接続した「グワー」の文脈的意味

まず名詞だが、「一人^{ひとり}ぐわー」「小聲^{こまごい}ぐわー」「小島^{こしま}ぐわー」「生物^{いちむし}ぐわー」「石^{いし}ぐわー」「島^{しま}ぐわー」「首^{くび}ぐわー」「赤舌^{あか-しほ}ぐわー」は、「小さい」という意味になっていると考えられる。「一人^{ひとり}ぐわー」「小聲^{こまごい}ぐわー」「小島^{こしま}ぐわー」は、「グワー」が接続している語に元々「小さい」という概念がある。「生物^{いちむし}ぐわー」は本文では「小^こさる生物^{いちむし}ぐわー（小さな生き物）」と書かれているし、「石^{いし}ぐわー」「島^{しま}ぐわー」「首^{くび}ぐわー」はそれぞれ「小石」「小島」「小首」と訳されている。「赤舌^{あか-しほ}ぐわー」は、これはハブの赤い舌で、蛇の舌というのは細くて小さいものであるためこれも「小さい」と言う意味なのだろう。「負^なぐわー」「目^めぐわー」「酒^{さけ}ぐわー」「話^わぐわー」に関しては、「グワー」が接続することによって、特に何か意味が加わるという訳ではないのだろう。これらの語は、大きいという概念を含んではいないし、また身近な存在として具体的な認識がなされているため、「グワー」が接続していると言えよう。「猫^まぐわー」「家^{いえ}ぐわー」「坂^{さか}ぐわー」は、それぞれ本文では、「悪猫^{やま}ぐわー（うす気味の悪い猫）」「やな家^{やな}ぐわー（あばら家）」「やな坂^{やな}ぐわーやっさーくれー（なんてきつい坂道なんだ）」と「やな」という語が付いている。これは、「嫌な」という意味なので、「グワー」が接続している語に対する嫌悪感、つまりはさげすみの意味となっていると考えられる。

「裏座敷^{うらざぶ}ぐわー」は、親愛のニュアンスになるのではないかと考えられる。「裏座敷^{うらざぶ}」とは家人の休息室、または婦人の居間のことである。ここで「裏座敷^{うらざぶ}ぐわー」と発言しているのは女性なので、普段自分がくつろぐ場所ということ考えたのかもしれない。

「牛^{うし}ぐわー」は、聞き取り調査では「グワー」は接続しないという回答だったが、この昔話では使用されている。牛は昔は人々にとって身近な物であったが、現代はそ

うではなくなったためと考えられる。本文では、同じ牛を指し示すのに、「牛ぬ子(牛の子)ぐわー」と「牛ぐわー」の両方を使用していることから、「牛ぐわー」は子牛の意味であると分かる。昔話に語られるような時代では、子牛の意味で使用されていたのだろう。そうすると、この「グワー」は「小さい」という意味といえよう。

「カラスグワー」は、「此の世の中うてい、一番ぬ御馳走や何やが?(この世の中で、一番のご馳走はなんだ?)」という質問への回答で、「カラスグワーを乗してーる芋(カラスグワーを乗せた蒸かし芋)」と使用されている。なお、このカラスは鳥のカラスではなく、沖縄料理のカラス(塩辛)¹⁾である。おいしい物への親しみを込めて「グワー」が用いられているのだろう。

「娘ぐわー」「チル(鶴)ぐわー」ははっきりとニュアンスが読み取れるわけではないが、野原(1992)が示すように、人名に付けて、その人物への親愛の情を表していると思われる。

「あんべーぐわー」は、「あんべー(案配)」自体は名詞である。しかし、「良いあんべーぐわー眠んじ込どーる」という本文が「ぐっすり眠り込む」と訳され、「良い」が付くことで形容語に似た働きを持つものとなっている。そこに「グワー」が接続することによって、「ちょっとした心地よさ」を表していると考えられる。それでは次に、こうした形容語に「グワー」が接続した場合の意味を検討していく。

4.2 形容語に接続した「グワー」の文脈的意味

次に形容語について見ていく。まず、「少ぐわー」「少てんぐわー」「近ぐわー」などは、もともとの語の意味から、「程度が小さい」という意味の強調だろう。「突然ぐわー」「今さちぐわー」「突然ぐわー」「一時ぐわー」「一瞬ぐわー」「早々ぐわー」もまた、どれも表す時間は短いものであるから、やはり程度の小ささを表しているのだろう。「うとうとう(うとうと)ぐわー」と「すっとう(こっそり)ぐわー」は、おそらく「わずかな動作」の意味を込めて用いられ、やはり「小さい」という概念を表していると考えられる。「不思議ざさぐわー」は、「不思議そう」と訳されている。文脈からはニュアンスが読み取りにくい、特に大きいという概念も含んでいないように思われる。もしかしたら、「ちょっとした不思議さ」「少し不思議に思う」のようなニュアンスとなるのかもしれない。

野原(1999)は「グワー」が接続しない語の中の例外として、「ナマ(今)」「ヒッチー(一日)」「チュチチ(ひと月)」「ヨンナー(ゆっくり)」には「グワー」が接続するとしているが、これらが例外となる理由は特に説明していない。その理由を挙げるとするならば、やはりこれらの語に「小さい」という概念が含まれているためであろう。「ナマ(今)」は発話時に近い時を表すことから、「ナマ(今)グワー」は「ほんの今」というようなニュアンスになると考えられる。「ヒッチー(一日)」「チュチチ(ひと月)」は、「グワー」が付かないとされる「イチジ(一時)」のような絶対時を表す語とは異なり、時間幅の程度として最小限の期間と捉えることができる。また、「ヨンナ

ー(ゆっくり)」は、速さの程度が小さいと捉えることができる。これらの語に「グワー」が接続するのは、以上のような理由によると考えられる。

次に、「かなさ(かわいい)ぐわー」「青^あってんぐわー」については、形容する対象への親愛の情が読み取れる。「かなさぐわー」が使用されている文は、以下のようなものである。

天^{ていん}ぬ御神加那志^{うかみがなし}や、太陽^{ていだ}とう月^{あつとめ}、まったく、どう^{くわ}ーぬ子ぬぐとうし、大^{いっぺ}変かなさぐわーそーいびたん。

(天の神様は太陽と月を、わが子のように、とてもとてもかわいがっていました。)

このあとに続く文章で、かわいがっている月に対して、「青^あってん、青^あってんぐわーそーる月^{あつとめ}よ(青い青い月よ)」と言う箇所があるが、この「青^あってんぐわー」も、月に対する親愛の情を込めて用いられた表現であると思われる。「ぬびぬびーとう(のびのびと)ぐわー」は、「幾日んかきてい、無事、皆^んが渡地^{わたんじ}んかい到着^ち、やがてい此所^んんじ、ぬびぬびーとうぐわー暮らす^{くとう}事^{こと}になやびたん。(いく日もかけて、無事、みんなが渡地へ到着し、やがて、そこでのびのびと暮らすようになりました。)」というように使用されている。これは、苦労してたどり着いた土地に対する愛着、のびのびと暮らすことのできる土地への親愛の意味なのだと考えることができる。

また、「豊^{ゆう}豊^{ゆう}とう(豊かに)ぐわー」については、もともとの語に「大きい」という概念があるため、「グワー」は接続しないのではないかと考えられるが、ここではさげすみのような意味を込めて使用されているのではないか。「豊^{ゆう}豊^{ゆう}とうぐわー」が使用されている前後の文章は、以下のようなものである。

昔^{んかし}んかし、あつ^と所^{ところ}なかい、兄^{ちやう}弟^{てい}ぬ二人、たんかーなーしー家^や作^{ちやく}てい、住^しどーいびーたん。兄^{やちち}や、広^{ひろ}っさ田畑^{たはた}ん持^むっち、裕福^{うえきんちゆ}人。家^やん大^まぎく作^{ちやく}てい、豊^{ゆう}豊^{ゆう}とうぐわー暮^{くら}ちよいびーたん。

あんしが、此^くぬ兄^{やちち}や、怠^{ふゆう}な者^{むん}ぬ、したたか肝^{ちむ}はごーり者^{むん}。此^うりから、いっぺ^{やく}欲^{むん}がかい者^{むん}やいびーたん。

(昔むかし、あるところに、二人の兄弟が向かい合った家で暮らしていました。兄は、広い田畑をたくさん持ち、大金持ちで、家も大きく豊かに暮らしていました。ところが、なまけ者で、とても意地が悪く、そして、たいそうな欲張り者でした。)

ここで用いられた「豊^{ゆう}豊^{ゆう}とうぐわー」は、おそらくとても誉められたものではない兄の人となりに対する軽蔑の念がこめられたものなのだろう。そのためもともとの語の意味に「大きい」という概念があったとしても、「グワー」の接続が可能なのだと思うられる。

5. まとめ

以上のように、本稿では聞き取り調査の結果と昔話の分析により、「グワー」が接続する語種と、「グワー」が接続した際の表現効果(文脈的意味)を考察した。まとめるると以下ようになる。

まず、「グワー」が接続する語に関しては次のようになる。名詞は話し手自身が身近だと感じる語に接続する。それと関連して、方言のほうが言葉として身近なため、標準語は付きにくく、方言は付きやすい。また、「小さい」という概念があるものに接続し、「大きい」という概念が含まれる語には付きにくい。形容語は「大きい」という概念があっても、形容する対象にさげすみもしくは親愛の情を持っていると使用できる。

「グワー」の表現効果(文脈的意味)は、まず、「小さい」という概念を表すことである。人に対しては、本来尊敬すべき対象に接続してさげすみの意になり、目下の者や自分と近い者・親しい者につけると親しみになる。しかし険悪な時などに「グワー」を接続して言うとさげすみの意になる。さげすみの言葉またはさげすみの言葉が修飾した語に付いて、その意味を強める。形容語に付いて、その形容語が修飾しているものへのさげすみ・親愛を表す。

本稿では那覇方言「グワー」が接続する語種と「グワー」が接続した際の表現効果(文脈的意味)について記述したが、拍数の問題も「グワー」の接続に関わってくるだろうから、検討の必要があるだろう。また東北方言「コ」についても深く検討していきたい、更に「グワー」と比較を行いたいと思う。

注

- 1) 「カラス小」とは、けっして可愛いカラスのことではない。スクガラスなどのカラスである。ヤマトグチだと、塩辛などの種類に属する」(『沖縄あーあーんーんー事典』より)。

謝辞

「グワー」に関する聞き取り調査では、以下の方々に話者として、ご協力いただきました。

親泊康治さん、金城存さん、国吉朝政さん、黒島亜希子さん、玉城優子さん、仲本和子さん、仲本将成さん、比嘉朝文さん、富名腰久雄さん

また、話者の方々をご紹介くださった那覇市立城西小学校仲地末子校長先生、那覇市立城南小学校東江美根子校長先生、那覇市立泊小学校福地哲功教頭先生、琉球大学中本謙先生、沖縄県立芸術大学仲原穰先生にも、心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 阿部貴人(1999)『阪大社会言語学研究ノート』大阪大学文学部日本語学講座渋谷研究室
国立国語研究所編(2001)『沖縄語辞典』財務省印刷局
此島正年(1986)『青森県の方言』津軽書房
佐藤亮一監修・小学館辞典編集部編(2002)『お国ことばを知る 方言の地図帳』小学館(『方言の読本』1991年刊行の増補改訂版)
田中春美編(1988)『現代言語学辞典』成美堂
西岡敏・仲原穰(2000)『沖縄語の入門 たのしいウチナーグチ』白水社
野原三義(1999)『うちなあぐち考』沖縄タイムス社
半田一郎編著(1999)『琉球語辞典』大学書林
日野資純(1958)「青森方言管見」『国語学』34 武蔵野書院
宮里千里(2005)『沖縄あーあーんーんー事典』ボーダーインク

資料

- 長田昌明編著(2005)『「うちな一口」で語り聞かせるふるりの民話』わらべ書房